

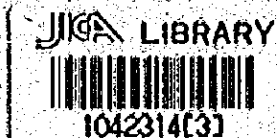
ヴィエトナムカントー大学農学部
協力巡回指導調査団報告書

昭和48年 3月

海外技術協力事業団

目 次

	頁
ほ し が き	1
1. 巡回指導調査団の派遣	3
1.1 派遣目的及び調査内容	3
1.2 調査団員氏名	7
1.3 調査日程	4
1.4 会議記録	8
2. ヴィエトナムの教育事情	13
2.1 現情	13
2.2 将来計画	14
3. カントー大学農学部の現情と将来計画	15
3.1 現情	15
3.1.1 カリキュラムと教員組織	15
3.1.2 施設及び供与機材	16
3.1.3 留学生と海外研修	19
3.2 将来計画	31
お す び	32



国際協力事業団

受入 月日 '84. 3. 9	123
登録No. 00042	24.7
	AF

は し が き

本協力協定は昭和28年3月6日で3年を経過したが、本協定のオタ条に「この協定は、いずれか一方の政府が他方の政府に対し6ヶ月前に書面による終了の通告を行なうことによつて最初の3年の期間の終了の日には又はその後を終了しない限り、その効力発生の日から6年の期間効力を有する」とあります。従つて、両国政府からなんの通告もなく、今後3ヶ年間継続されることになりました。今回の巡回指導調査団の派遣はこのような背景を斟酌し、今後の協力方向を確認することにありました。勿論派遣専門家との技術的問題についても現場で解決することを目途として、意見交換をして頂いた。

教育協力は長期的展望に立つて推進しなければなりませんと同時に相手国政府の教育政策に合致したものでなければならず、常にこの動向を把握し、本協力の位置づけをはっきりしておかねばなりません。

それだけに巡回指導調査団に与えられた仕事は巾広いものになったと思います。

おわりに、この調査にあられた団員、各位のご苦勞に厚くお礼申し上げますとともに、調査の実施に種々便宜をいた

だいた、 ヴィエトナム政府関係者、 在ヴィエトナム日本大使館派遣専門家、 およびOTCAヴィエトナム事務所の各位に
衷心より感謝申し上げます。

昭和28年3月

海外技術協力事業団

理事長 田村 景一

1. 巡回指導調査団の派遣

ヴィエトナムカントー大学農学部協力は、昭和45年3月7日の協定締結以来3年を経過し、この間、専門家延べ6人を派遣するとともに、約1億円に亘る機械供与を行なった。

現在は、3名の長期専門家と、1名の短期専門家が、本協力の目的に沿って着実な活動を展開しており、年月の経過とともに量的にも質的にも充実して来た。

今回の巡回指導調査団は昭和46年3月の派遣に続いて2度目のものである。

1.1. 派遣目的及び調査内容

本来巡回指導調査団は、派遣専門家の技術的諸問題について検討、助言を与えるものであるが、現地を訪問する機会が少ない現状から、あらゆる問題について、就中協力の効率的運営を図るための協議も非常に重要な任務となっている。

今回の巡回指導調査団は、本来的目的もさることながら、今後3年間継続する協力の内容を、現地関係者と具体的に協議することにあつた。

調査項目としては、

- 1) カントー大学農学部の現状と問題点
- 2) カントー大学農学部の将来計画
- 3) 専門家派遣の業種別年次計画
 - a) 長期専門家
 - b) 短期専門家
- 4) 研修員受入れの基本方針
- 5) 機材供与の年次計画
- 6) *Joint Committee* の運営
- 7) 留学生の受入問題
 - i) 留学生の派遣方針
 - ii) 留学生の実態(フィリッピン大学農学部へ留学しているカントー大学農学部の助手)

1.2 調査団員氏名

加藤 義行 文部省大学々術局
 (教育行政) 技術教育課

田中 亮一 茨城大学農学部
 (カリキュラム) 助教授

新保 昭治 海外技術協力事業団
 (企画調整) 農業協力部

1.3 調査日程

昭和28年3月7日から15日間

3月7日 12時15分C×501便でサイゴン向出発

途中、ホシゴンを經由し午後7時、予定より1時間
15分遅れサイゴン着

O.T.C.Aサイゴン事務所の河西所長、橋本調整員の
出迎えを受ける。

3月8日 午前10時30分 日本大使館訪問、奈良
大使、松原参事官、西村書記官に表敬

午後9時～6時まで大使館で河西所長と打合せ、調
査内容につき検討する。

夕食後、調査団員の内部打合せを行う。

3月9日 午前10時、大使館で西村書記官との打合
せ、調査目的、内容などについて検討する。

午後4時文部省に *Pham Huu Hiep* 次官を訪ね、
懇談、教育行政、就中、農業高等教育事情について
聴く。

3月10日 午前7時、日本大使館、情報文化センター
に小林書記官を訪ね、留学生受入問題について話し
合う。

夕食は大使公邸で、大使の招宴

3月11日 午前10時、調査団の内部打合せ。

3月12日 カントー市へ移動

午前7時30分、カントー着。農学部副学部長の
Mr. Nguyen phu Thien、柏原専門家の出迎
えを受ける。

10時30分、永田リーダーの部屋で小休、池田專
門家、宮部専門家と会う。

午後2時30分～6時まで、永田リーダーはじめ專
門家全員と打合せ、本協力の問題点などについて話
し合う。

3月13日 午前10時、各専門家の研究室を視察、午
後は、供与撈枝の使用状況などについて視察、調査、
夕食はカントー大学々長主催の晚餐。

3月14日 午前9時学長官舎において、大学側関係者
と打合せ会議

1 午後8時引き続き会議、過去の協力内容の検討、及び
反省、現状の問題点、将来の協力方向について話し
合う。

夕食後は、会議のまとめについて検討する。

3月15日 午前8時、メコンデルタに於ける農村事情

視察、Phong Namを訪れる。メコン河を舟で下り、
農村では特に治安状況について事情を聴取する。

午後6時、宿舎に帰る。

3月16日 午前、近くの果樹園を視察、サイゴンへ移
動。

午後9時30分、日本大使館へ挨拶、西村書記官、
河西所長に調査結果の概略報告をする。

3月17日 午前8時30分、車でVACを訪ね、畜産
学科長の案内で学内を見学する。

11時、大使館で、西村書記官、河西所長にカント
ーでの調査結果の詳細を報告し、併せてこれからの協
力について打合せをする。席上、不動産貸与につい
ても現地大学側の要望を伝える。

3月18日 日曜のため休み、帰国準備をする。

夕方から、小林書記官と留学生の件につき再度打合
せをする。

3月19日 午前9時30分、Majestic Hotelを出
る。クリソニット空港に向う。

11時20分、PANAM 842便でマニラに向う。

マニラ着、13時30分、OTCA、マニラ事務所。

山村所長の出迎えを受ける。宿泊先のホテル、フィリッピナスに落ち着き、早速山村所長と打合を行う。
3月20日、午前9時、ホテルを出発し、ロスバニオスにある、フィリッピン大学、農学部に向う。10時30分、ロスバニオスに着く、SEARCHAのG. SAGUIGUIT博士の案内で、校内を視察、午後2時より、ヴィエトナムカントー大学農学部からの留学生と懇談する。

6時、ホテル着

3月21日、午前帰国準備

16時40分、QF262便でマニラを飛び立つ。

東京着、21時30分

14、カントー大学農学部関係者との会議録

カントー大学農学部 *Truong* 農学部長はじめ、永田リーダーなど関係者との会議は次のようなものであった。

1

Minutes of the Meeting between the Japanese
Technical Assistance Team and the Faculty of
Agriculture, held on March 14, 1973.

During the visit of the Japanese Technical
assistance Team from March 12 to March 16 at the
Faculty of Agriculture, a meeting was held to review
the progress and to discuss about future co-operation
in the Japanese Technical co-operation program.

The following members were present:

- Mr. Kato (Ministry of Education,
Tokyo)
- Dr. Tanaka (Ibaragi University)
- Mr. Shimpo (OTCA, Tokyo)
- Mr. Hashimoto (OTCA, Saigon)
- Dr. Nagata)
- Dr. Ikeda) Japanese Professors
- Prof. Kashiwabara) and Expert
- Mr. Miyabe)

- Dean Nguyen Viet Truong)
- Mr. Vo Tong Xuan) Faculty of
- Mr. Chau Van Dung) Agriculture
- Mr. Nguyen Phu Thien)

In the meeting of the following subjects were
discussed and agreed upon,

1/- Progress of the Assistance program:

The assistance program has been progressing smoothly in the past three years and the co-operation between the Japanese professors and expert and the staff members of the faculty has been good and contributed greatly to the development of the faculty.

2/- Present condition of the faculty:

The present number of student at the faculty has remained static, the total number of students in 1973 is 220 but the number of students will be increased when the building space of the faculty is expanded. The lack of building space poses a lot of difficulty for the development of the faculty. Both sides understood that the construction of new campus would be very significant in increasing the efficiency of the current technical co-operation. In addition to the academic activities, the Faculty has carried out a socio-economic survey for the Committee for the Investigation of the Lower Mekong Basin in 1971, and more recently a project for the study of heavy Mekong delta soil has been agreed between the faculty and the Mekong Committee with the support of AID and RED (Regional Economic Development).

In 1972 about 33 students graduated from the faculty, except 8 of them are in the army, the rest of the graduates obtained their jobs at the faculty, the Ministry of Agriculture, agricultural high school and a few private companies. Two of the students obtained scholarship to study in Philippines.

There was an explanation of an up-to-date list of teaching staff of the faculty.

3/- Future plan of the faculty:

The teaching at the faculty is presently limited to a course leading to a bachelor degree in Agronomy but in the near future the faculty will establish other courses leading to a degree in Animal Husbandry (and Agricultural Engineering). The faculty will admit about 50 students in 1974 for the Animal Husbandry course. Other courses in Agricultural Economic and Agricultural Chemistry will be established later. For the time being the establishment of new course in Animal Husbandry will bring further need for additional equipments and assistance from the Government of Japan.

The second phase of development of the faculty will concentrate on the research activity and the establishment of a Tropical Agricultural Research Institute. Concurrently a course leading to a post graduate diploma in Agricultural Extension will be organised.

4/- Japanese professors and Expert:

In 1973 fiscal year the faculty would like to request:

- One professor in Soil Science (soil classification and soil physics)
- One professor in Plant Pathology or Irrigation to replace Dr. Ikeda.

- .. One professor in Poultry Production to replace Prof. Kashiwabara.
- .. One short term expert in Fresh Water Fish Husbandry for a period of 9 to 12 months.
- .. One short term expert, an architect or an expert in Laboratory Equipment.

5/- Scholarship and training:

Regarding this subject, the Faculty strongly insisted that the number of scholarship given to the Faculty should be clearly indicated in the annual list of scholarship offered by the government of Japan.

In 1973-74 the faculty will request two short term training scholarships in Animal Husbandry and Farm Machinery.

6/- Equipments:

In this year's request, the emphasis will be put on the equipments for the Animal Husbandry Department.

In order to make full use of the equipments and to facilitate the ordering of new equipments up-to-date catalogs from various manufacturers are required. To assist future budgeting the Faculty will make the list of requested equipments for the next three years, the list for 1973 will be submitted as soon as possible and the list for 1974 and 75 will be submitted before August 1973.

2 ヴイエトナムの教育事情

2.1 現情

ヴイエトナムの教育制度については、O.T.C.A. および文部省の文献に記載されているので今更述べる必要はないが、以下でヴイエトナム政府発表の統計表を紹介する。その表の理解を助けるために、農業教育を例として、2.1.1図に示した。

1967～1968年から1971～1972年にかけての公立学校における、児童、生徒および学生数の変遷は2.1.1表でみられるようにいずれも増加しており、児童数は約1.5倍で、1972年における就学率は8.5%である。しかし就学率が8.5%でも、授業は3部ないし4部に分けて行なわれており、教育内容については不十分であると思はれる。普通中学は2.4倍であるのに対して技術中学は1.9倍で意外に少なかった。一方農業中学は4.3倍で最も増加した。しかし農業高校および技術高校の増加率は他と比較して劣っていた。大学教育については、1967～1968年では児童数の約1.8% (29,755名)で、日本とは異なり、極めて狭き門であることがうかがえ、1971～1972年では

学生数が増加したか（60,514名）、それでも児童数の2.6%である。工学と農学との比較は1961～1968年では農学が少なく、1971～1972年では農学が多くなり、工学の増加率が10.5.2%であるのに対して農学は166.6%で高等農業教育の拡大がうかがえ、農業中学生の増加傾向も顕著であるゆえ、農業立国の意志が感じられた。

2.2 将来計画

グイエトナム政府発表の4カ年計画は2.2.1表のとおりで、児童数は33.5%の増加にとどまるが、農業中学は2,620名から33,300名と、12.5倍に増え、さらに農業高校でも3.7倍に増加させることを計画している。一方大学は1971～1972年の児童数に対する割合が2.5%であったが、4カ年後には5%まで増加させる予定である。工学と農学との関係は1971～1972年では農学の方が多かったが、4カ年後では工学と農学をほぼ同数にとめており、日本にありぬ工学比重とは異なり、将来においてもオノ次生産優先の考え方がうかがえた。

3 カントウ大学農学部の現情と将来計画

3.1 現 情

3.1.1 カリキュラムと教員組織

1972年度のカリキュラムは3.1.1.1表に示した通りである(註:この訳はこの報告書のために急いで行なったもので、不適當だったり、または誤訳もあるかも知れないのでお許しを頂きたい)。講義内容は不明であるが、この科目名をみた限りでは、畜産を含めた農学科としては、広範囲にわたる、しかも実験実習が多く、卒業後オノ線に出て、普及活動に入る場合には極めて適切なカリキュラムと云える。

教員組織については3.1.1.2表に示した通りであるが、各教官の授業計画を調べてみると、1科目でも講義を行なっている教官は11名で、実験実習のみを行なっている教官は14名で、講義も行なっている教官のうち、本格的な者は2名のみ(Dean: Nguyễn Việt Thường と Assistant Dean: Nguyễn Phú Thiên)である。あとの講義は非常勤17名と、派遣教官5名(現在4名)で補っている状態で、本来的に講義と実験指導は切り放されたものなし。また、

当学部が講義と実験を一括して単位認定していることから、ますます変則的な現情であると云わねを得ない。従って非常勤の教官の出張が可能か不可能かが授業時間割に影響し、毎週時間割を作成して¹学生に示している始末で、学生の計画的な勉強が出来るのかどうかの懸念点として考えたい。

3.1.2 施設及び供与機材

農学部の学生は、現在220名であり、昨年第1回目の卒業生を出した。

1968年に設置された農学部は、他の法律学部、文学部、理学部、教育学部に比し、新しいため、施設設備とも最も劣悪な条件下にあった。このため、我が国政府に対し、農学部運営に対する全面的な援助協力を要請してきた。その結果、1970年3月に本協力に関する二国間協定が締結され、爾来、専門家の派遣、資機材の供与、研修員の受入、留学生の受入れ等も行われて来た。

昭和45年以來の機材供与も、4次まで済み、総額1億セなった。勿論、日本の農学部と比し、未だ極端に機材は少ないが、教官数、学生数に較べれば見劣り

はしない。又それだけに効果的利用は、今後の課題として検討を要する。

しかし、技術協力の一つの要素である機材供与が、必ずしも効率的に活用されていないという理由で機材供与を云々する問題でもないと思う。なぜなら、技術協力は、ある一定の期間を限度として行なわれるものであり、社会、経済構造の全く異なる南米途上国と、日本との流れにおいて、捉え、修正、判断すべきものではないと思われる。

カントー大学農学部に関して云えは、殆んどが実験用資機材であり、その使用頻度も、日本とは比較にならない程低い。しかし農学部の教科課程と卒業資格の付与には必要欠くべからざる実験でもある。将来を見越した協力として期待する他あるまい。

過去の資機材供与は、実験室単位に供与したか、就中、農学分野の供与を主として行った。又、一般教養課程の視聴覚機材、顕微鏡なども、十分な内容となっている。勿論、若人の徴兵が減り、学生数も増加すれば、少しく追加する必要がある。

来年度以降の機材供与は、畜産学分野の機材を主と

し充実することとし、向う3ヶ年間の要請機材リスト
を作成することにした。

3.1.3 留学生と海外研修

3.1.3.1 教官の海外留学の状況

カントー大学農学部には、現在、農学、畜産学および農業工学の三つの履修コース（*Department* と称しているが、日本の大学の学科とは違う。）が設置されており、専任教官数は *Nyugen Uiel Throng* 農学部長以下 35 人である。

これら 35 人の教官のうち現在海外へ留学している者は 6 人であり、その留学先国別は、英国 3 人、フィリッピン 3 人、米国 1 人、タイ 1 人である。また、これら 6 人のほかに、カントー大学理工学部の教官 3 人が日本へ留学中であり、この 3 人は帰国後カントー大学農学部の教官として就任することが確定している。従って、農学部関係の教官で現在海外へ留学中の者は 7 人となっている。これら 7 人のうち、今年度帰国予定者は 2 人（ただし、うち 1 人は帰国時期が遅れる予定である。）であるが、これらの者について、学部長としては講師として採用したいとのことであった。

なお、前述の 7 人のほかに、既にフィリッピン

留学（SEARCA^(注1)、東南アジア農業研究センターの
 奨学資金によりフィリッピン大学農科大学^(注2)へ留学）
 から帰国し、現在、カントー大学農学部において農
 学系担当の助手（助手ではあるが、他の助手と違い
 講義を担当している。）として勤務している者がノ人
 いる。

〔現在、海外留学中の教官の氏名、専攻分野、留学
 国一覽〕

氏 名	専攻分野	留学国
Nguyen thuong Chanh	畜産学	タイ
Tran Van Hou	稲 学	フィリッピン
Nguyen Van Huynh	昆虫学	フィリッピン
Vo ai Quoc	畜産学	フィリッピン
Nguyen duc Thanh	畜産学	米国
Nguyen Duong	食品加工学	英国
Nguyen Phi Long	工芸作物学	英国
Nguyen Thai Vu	農業機械学	英国
Tran Van Nam	農芸化学	日本
Dang Van Tren	土 壌 学	日本
Ho minh Bach	作物学	日本

〔既に海外留学から帰国し、現在カントー大学農学部
部に勤務している教官の氏名、専攻分野〕

氏 名 専攻分野

Nguyen Van Thieu

〔注1〕 *SEARCA; The South-East Asian
Regional Center for Graduate Study and
Research in Agriculture*

〔注2〕 *フィリピン大学農科大学; University
of the Philippines at Los Baños, College
of Agriculture*

3.13.2 教官の日本への留学に関するカントー大学 側の主張

調査団とカントー大学農学部幹部との会談は3月
7日午前9時よりカントー大学学長官舎会議室に
おいて行なわれた。出席者は下記のとおりであつた
が、特に派遣専門家（永田リーグー他3人）もオブ
ザーバーとして出席した。

〔調査団〕 田中亮一、加藤教行、新保昭治

〔カントー大学農学部〕

Nguyen Viet Truong (農学部長)

Vo Tong Xuan (農学系主任)

Chau Van Dung (畜産学系主任)

Nguyen Phu Thien (農業工学系主任)

(派遣専門家)

永田良胤, 柏原孝夫, 池田三雄, 菅部芳照

この会談において、カントー大学農学部側(発言の大部分は農学部長)より出された主な意見は次のようなものであった。

(1) カントー大学農学部としては、現在ヴィエトナム共和国に割当てられている日本への留学生8人の他に、カントー大学農学部分として5人を別枠で確保することを強く要望する。

(注) カントー大学農学部分として5人を別枠で確保することについて、調査団としては、前回の調査団も5人を別枠で確保することには同意していないこと、今回も別枠である人数を確保することはできないことを説明した。

(2) 過去2年間、ヴィエトナム共和国割当て分8人の中にカントー大学農学部分として3人を確保す

ることには非常な困難を伴った。カントー大学側としては今後とも引き続き努力し、最低3人は毎年日本へ留学できるよう努力するが、従来の経緯からして必ずしも楽観的ではない状況にある。日本側としても毎年最低3人を確保することについて、カントー大学およびソイエトナム文部省側の努力を促した。

(3) 現在のカントー大学農学部施設の施設・設備、教育レベルからして、将来のカントー大学農学部教官となるべき者を学内で養成することは不可能なので、カントー大学農学部としては現在の助手および今後助手として採用されるであろう教官全員を海外留学させ、後継者養成の実を挙げたいと考えている。

(4) 日本へ留学したいとの希望者は多いが、日本の留学生決定時期が他の国に比べ遅いので決定時期をもう少し早くしてもらえると幸いである。

(5) 新たに設けられたいわゆる大学推せん方式については、日本からの派遣専門家と十分相談の上活用したい。

これらの主張に対し、調査団としても日本側の考え方を述べ、その結果を次のような *Minute* として残すこととした。

5. Scholarship

Regarding this subject, the faculty strongly insisted that the number of scholarship given to Faculty should be clearly indicated in the annual list of scholarship offered by the government of Japan.

3. 1.3.3 カントー大学農学部教官の日本への留学に対する日本大使館の意向

調査団はヴィエトナム共和国から日本への留学生、特にカントー大学農学部教官の日本への留学問題について意見を交換するため、3月7日午前、日本文化情報センターに在ヴィエトナム大使館一等書記官小林慶三氏を訪問した。

小林一等書記官の主な意見は次のとおりであった。

(1) ヴィエトナム共和国側は、現在ヴィエトナム共

和国に割当てられている日本への留学生の人の別
枠でカントー大学農学部教官を日本へ留学させる
ことについて強い希望をもっており、日本側の柔
軟な留学生制度の運用に期待をしている。

(2) ヴィエトナム共和国割当て分8人の中に今年度
はカントー大学農学部教官を3人入れたのは、在
ベトナム日本大使館とヴィエトナム文部省の調整
によるものであり、日本大使館としても、今後こ
の現状をふまえた上で対ヴィエトナム共和国文部
省と連絡を密にする必要がある。

(3) 上記(1)および(2)のような状況に鑑み、小林一
筆書記官としては、

ア、ヴィエトナム共和国割当て数の増加。

イ、カントー大学農学部に関する柔軟な取扱。

を希望するが、特に、アについて1人でも2人で
も増員することを実現されるようお願いしたいと
のことであった。

なお、これらのほか、留学生問題に対する次のよ
うな一般的意見が述べられたので参考までに記載し
ておきたい。

- (1) 割当て教(員)に対して割増程度の推せんを
 することについては、ヴィエトナム共和国の内部
 事情(順位の入替を勝手に行なった等の例がある)
 から、困難であることをご理解願いたい。
- (2) 日本へ留学する場合の最大の問題は言葉の障害
 である。しかし、日本への留学希望者は多いし成
 績が悪いと云うことはない。
- (3) ヴィエトナム共和国側の仕事が極めてルーズな
 ため、時期を失することが多い。また、政府関係
 者と特別の関係がなければ試験さえ受けられない
 のが実情である。

(参考資料)

表1 各国への年度別留学生派遣数(国費のみ)

国名	1970	1971	1972	備考
日本	1	1	1	
西独	—	4	—	
オーストラリア	59	不明	64	
ニュージーランド	18	14	9	
米 国	19	15	23	
フィリッピン	不明	6	不明	
英 国	不明	不明	不明	
総 計	103	51	104	

(注) この資料はヴィエトナム共和国文部省が作
 成したものである。

3.1.3.4 カントー大学農学部教官の日本への留学に 対する派遣専門家の意向

調査団は3月7日派遣専門家と話し合いの機会をもち、当日はカントー大学農学部における教育の現状、供与機材の活用状況、大学院問題、留学生問題、後続派遣専門家、将来計画等について幅広い意見交換を行なったが、留学生問題についての派遣専門家の意見は次のとおりであった。

- (1) カントー大学農学部は何らかの奨学金を別枠で多く入額主張している。
- (2) 派遣専門家としても、何らかの方法によって出来るだけ多くの若手教官を日本へ留学させ教育援助の効果を挙げたい。
- (3) 教官の大部分は日本へ留学したいとの希望を持っているが、他の国の決定時期が日本に比べ早いこと(フィリッピン6月、英国も同じ頃決定する)、他の国の場合当初から人数が確定していること等の理由により、極めて残念ではあるが他の国へ留学する者が多くなってしまふ。
- (4) 留学生の問題にかぎったことではないが、カン

トー大学例としての年次計画はない。しかし、農学部長としては助手全員を留学させたいとしている。

(5) 大学推せん方式による国費留学生の受入れについては、今年6月に帰国する池田教授(鹿児島大学農学部農学科)、2月に帰国する柏原教授(茨城大学農学部畜産科)の分として各1人計2人をせよお願いしたい。

なお、柏原教授としては、現畜産学コース主任である CHAU VAN DUNG を大学推せん方式により茨城大学農学部へ留学させることを検討したいとのことであった。

3.1.3.5 カントー大学農学部教官の日本への留学についての将来計画

昭和28年度にカントー大学農学部から日本へ留学する教官は次の3人である。

Pham Van Kim 農学 (特に植物の病理、微生物に関する研究)

Pham Van Chong 農学 (特に植物栽培に関する研究)

Huynh Cong Tho 農学 (特に土壌の分析, 土質分析方法に関する研究)

なお、カントー大学農学部教官の海外留学についての将来計画について、農学部長としては、今後3年計画で、現助手全員および今後採用予定者を海外留学させ、後継者養成の實を挙げたいとしている。

(注) カントー大学農学部には今後毎年6人の教職員を増員することが政府決定されている。

農学部長が私見として示した国別の希望数は次のとおりであった。

日本	5人	フィリッピン
英国	3人	米 国
タイ	2人	その他 (ポーランド他)

3.1.3.6 カントー大学農学部よりフィリッピンへ留学している者の現況

現在カントー大学農学部から SEARCA の奨学金によってフィリッピン大学農科大学に留学している教官は、*Tran Van Hoa* (農学)、*Vo Ai Quac* (畜産学)、*Nguyen Van Huynh* (昆虫学) の3人であり、その期間は1971年6月

〜2年間である。

彼等はフィリッピン大学農科大学大学院（マニラの北約90km, *Los Baños* にある。）で現在研究中であるが、2年間の留学期間のうち3ヶ月を英語教育にあてられている。また、留学終了時には修士の資格を取得できる。

奨学金としては、月額500ペソ（日本円に換算すると24,000円）が支給され、他に年額500ペソ（日本円に換算すると20,000円）の雑費が支給されている。また、SEARCAから現物供与として留学生のための論文指導用の実験機材が与えられている。

フィリッピン大学農科大学の施設設備は、カントー大学農学部と比較すれば優れたものであるが、日本の大学の施設設備と比較した場合弱体であり（特に設備は弱体である）。その意味においても日本の大学へ留学する方が効果的であると推察される。

現に、フィリッピン大学農科大学へ留学し既に帰国している *Nguyen Van Nhoi* 教官の話によっても、留学して教育研究上有意義だったことは少ないとのことであった。

3.1.3.7 研修員の派遣

カントー大学農学部から、1973～1974年に畜産学および農業機械の2人の研修員を日本へ派遣したので受け入れてほしいむねの要請があった。

3.2.1 将来計画

カントー大学側としては来年度にも畜産学科を独立させる意向であるが、現在のカリキュラムは改良普及員養成には適していても農学および畜産の専門家を育てるには不充であるので、将来の学科増設により適切なカリキュラムが作られるであろう。

教官組織については、留学により *Master* を取得し、順次帰国すれば講義を担当でき、非常勤に頼らなくなるであろう。

おすび

ヴェトナムは一応表面的には和平成立とは云え、未だ窺
砲心時には聞え、決して平和になったとは云えない。しか
し、朝の暗いうちから登校して来る学生諸君をみると、ま
た若い教官の熱心な質問に接したとき、一日でも早く、充実
した教育、研究活動の出来る学園を、と望まずにはいられな
い。また世界の食糧事情を考えると、ヴェトナムが公害
に汚染されない生鮮食品を世界に供給し得る基地として生き、
その中心としてカントー大学農学部が存在が大きくクローズ
アップされる日もそう遠くはないと信ずる。

以上極めて短時日で全貌を把握できたとは思わないが、有
効的に動くことができその任をいくらかでも全うできたこと
は喜びに耐えない。

ここに、カントー大学農学部の沢遺教官、永田、池田、柏
原、宮部各先生、Truong 学部長他の好意に感謝し、また
種々の情報、便宜を頂いた、在ヴェトナム日本大使館の奈
良大使を初め、松原参事官、西村一等書記官、小林一等書記
官、OTCAサイゴン事務所、河西所長、橋本調整員、在フ
イリッピン日本大使館松下一等書記官、SEARCA派遣教
官SAGUIGUIT博士、OTCAマニラ事務所山本所長、

熊野JOCV調整員の各氏に厚く御礼申し上げます。

2.1.1 四 ヲイニトナムの教育制度 (農業)

年令	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
学年	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17
	Elementary			High School				Secondary				Tertiary					
								Agriculture									
								Agriculture				Agriculture					
								Agriculture				Agriculture					
								General									

2. 1. 1 表

Enrollment in each field of study and percent
in the public education system

	1967—1968	1971—1972	%
	academic year	academic year	increase
Elementary	1,627,660	2,363,700	46.3
High school			
- General education	114,600	390,911	138.4
- Technical education	5,050	7,720	92.5
- Agricultural, Fore- stry and Animal husbandry	2,720	7,620	333.3
Vocational Secondary			
- Technical	1,060	1,260	12.10
- A.F.A	217	233	11.4
Tertiary			
- Professional	29,080	58,440	102.7
- Technical	367	453	185.2
- Agricultural	368	321	166.6

Number of students
by fields of

	1971 No. of students	1972 No. of teaching staffs
Elementary	2,363,700	47,100
High School		
- General education	390,700	9,700
- Technical education	9,720	150
- Agricultural, Forestry and Animal husbandry	9,620	(2) 420
Vocational Secondary		
- Technical	1,200	115
- A. F. A	233	(1)
Tertiary		
- Professional	58,940	970
- Technical	153	17
- Agricultural	821	78

(1) The No. of teaching staffs

and teaching
study in the public schools

1975		1976		increasing rate(%)	
No. of	students	No. of	teaching staffs	students	teaching staffs
	3,115,000		62,000	33.5	31.6
	813,500		18,200	108.1	87.6
	28,500		1,110	193.2	70.8
	33,300		1,240 ^(?)	246.2	242.9 ^(?)
	1,460		150	21.7	30.4
	800		(1)	273.4	(1)
	154,000		3,050	161.3	214.4
	1,460		160	93.9	138.8
	1,430		140	74.2	79.5

has been included in (2)

3.1.1.1 表

	一 年 次			二 年 次		
	講 義	實 驗	單 位	講 義	實 驗	單 位
植 物 学	60	15	3	農 学 概 論	20	1
動 物 学	60	15	3	植 物 生 理 学 II A	15	2
物 理 学	60	15	3	“ B	15	2
化 学	10	15	3	植 物 分 類 学	20	1
教 学	30		1	植 物 生 態 学	30	1
農 業 概 論	30		1	家 畜 飼 養 与 豚	30	1.5
火 話	60	60	3	農 業 地 質 学	30	1.5
農 場 实 習		70	1	昆 虫 学	30	1.5
夏 期 休 假 实 習			1	生 化 学	30	1.5
				内 燃 機 関 学	20	1
				气 象 学	15	1
				統 計 学	30	1
				英 語	10	3
				英 見		1
計	360	450	17		465	20

3 年 次			1 年 次				
	講義	実習	単位		講義	実習	単位
植物学&土壤学	45	45	2	土壤保全学	20		1
土 壤 学	60	60	2.5	作物保全学(昆虫)	30	45	1.5
農業水利学	30	45	1.5	“ (前筑)	30	45	1.5
農業機械学	30	60	1.5	稻 作	60	90	3
環 境 学	60	60	2.5	花卉園芸学	45	45	2
遺伝と改良	30	45	1.5	作物の貯蔵と加工	45	45	2
家畜飼養学: 鶏	30	45	1.5	農具経理と管理	60		2
“ : 牛魚	30	45	1.5	農村社会学	45	30	1.5
実験実習法	30	45	1	農村建設	20	30	1
災 害 防 護	60		2	測 地 学	20		1
小 論 文			1.5	卒業論文			2.5
	405	420	17		375	330	17

3.1.1.2 表

Faculty of Agriculture
Can-Tho University

staff member 1972

<u>Position</u>	<u>Name</u>	<u>Degree</u>
Dean	Nguyen Viet Truong	PhD, Australia
Assistant Dean (Academic)	Nguyen Phu Thien	MS(Agr), New Zealand
Assistant Dean (Administrative)	Pham Van Kim	B Agr Sc, Vietnam
Head of Agronomy Dept	Vo Long Kuan	M Agr Sc, Philippines
Head of Animal Husbandry Dept	Chau Van Dung	B Agr Sc, Viet Nam
Head of Agricultural Engineering Dept	Nguyen Phu Thien	"
Farm Manager	Tran Dang Hong	B Agr Sc, Viet Nam

Staff member of Agronomy Dept

Phan Van Chuon	B Agr Sc, Viet Nam
Do Van Chuon	B Agr Sc, Can Tho

(20)

73

Speciality

Plant nutrition, Tropical Pasture

Tropical Farm Mechanization

Pathology

Agricultural Chemistry

Saigon Animal Husbandry

"

Saigon Oil crops

Saigon Plant physiology

Viet Nam Genetics

(4)

Ha Huy Hoang	B. Agr. Sc., Saigon
Nguyen Van Nhiem	B. Agr. Sc., Saigon
Monz phasc Minh	B. Agr. Sc., Can Tho
Nguyen thi Nghiem	B. Agr. Sc., Can Tho
Nguyen Thanh Nghiep	B. Agr. Sc., Can Tho
Do Vinh Quang	B. Agr. Sc., Can Tho
Le Dinh Qui	B. Agr. Sc., Saigon
Le Thi Sen	B. Agr. Sc., Saigon
Huynh Cong Tien	BE (Chem.), Saigon
Huyng Cong Tho	B. Agr. Sc., Saigon

Staff member of Animal Husbandry Dept

Tran Lam Huyen	B. Agr. Sc., Saigon
Vu Ngoc Ruan	B. Agr. Sc., Saigon
Tran Minh Tam	B. Agr. Sc., Saigon
Tran Thanh Tinh	B. Agr. Sc., Saigon

Staff member of Agricultural Engineering Dept

Pham Thanh Bach	BE (Mech.), Saigon
Nguyen Van Ni	B. Agr. Sc., Saigon
Nguyen Van Thicong	B. Agr. Sc., Saigon

Agricultural Economics

Vegetable Crops

Plant Physiology

Plant Pathology

Rice

Soil Science

Fruit Trees

Insects

Soil Chemistry

Pedology

Swine Production

Fishery

Animal Husbandry

Poultry Production

Heat Engine

Farm Machinery

Row Crop Mechanization

Truong Minh Truong B Agr Sci Can Tho

Staff member studying abroad

Nguyen Thuong Chanah Thailand

Tran Van Hoa)

Nguyen Van Huynh) Philippines

Vo ai Quoc)

Nguyen Duc Thanh U S A

Nguyen Duong)

Nguyen Phi Long) United Kingdom

Nguyen Thai Vu)

Tran Van Nam)

Da ng Van Tren) Japan

Ho minh Bach)

Irrigation

